未来をひらく

目次

序章 ――日本のふるさとから想う
遠野から震災の意味を問う…10
超弩級の大震災が…15
第一章 「つながり」の復活
1．大震災の被災地を廻って
空前の大震災…26
三浦海岸――巨大津波の無残な爪痕…34
2．自衛隊の頼もしさ
道路をだれが復旧したのか…39
当然と思うなかれ…46
3．日本は「無縁社会」にあらず
壊れかけていた日本…48
結び直された家族の絆…53
4．故郷の力
被災地に流れた唱歌「故郷」…60
生と死は接している…12
大震災が国を変える…19
福島県から宮城県へ…29
千年兵を養うは一日のため…42
本当に「無縁」なのか…50
大御心につながる…56
思い出の復元…63
「たましい」の故郷を取り戻そう…67
第二章 原子力とエネルギーの未来
1．現代文明を揺るがす「原発震災」
見えない脅威…74
世界への影響…78
2．放射能をめぐる安全と安心
聞こえなくなった「反対」の声…81
安全基準に対する不信…88
3．原発事故と技術者の倫理
職人の質とモラル…97
4．「地球倫理」からみた原発の未来
原発推進は是か非か…104
まことに厄介な課題…111
文明の質を変えるエネルギー対策…119
さまざま自然再生エネルギー…123
原発事故は人災・犯罪である…76
繰り返された失態…85
ある避難者の苦悩…92
職人の世界のモラルハザード…102
「地球倫理」の理念…108
倫理に悖る原発推進…114
自然再生エネルギーへの期待…122
「文明病」を乗り越える…126

第三章　日本人の強さと弱さ
1．災害に揉まれてきた日本人
「海やまのあひだ」に暮らす…130
災害を乗り越えてきた強さ…136
2．日本人の美質
海外メディアから絶賛された日本人…139
長所は短所でもある…147
3．生きている「献身」の道徳
発揮された日本の底力…150
「献身の道徳」は生きている…156
4．克服したい日本人の弱点
すさまじい風評・デマによる被害…162
備えなければ憂いなし…168
第四章　希望の未来を切りひらく
1．災いを福に転じる
「千年に一度」の大震災…132
利他的精神と勇気…145
殉職した人たちの記憶…153
献身は道徳の大本…160
原発について知らない国民…165
災害から生まれるユートピア…174
平常時のユートピアを目指して…182
2．犠牲者へのまなざしと祈り心
あなたは代わって下さった…186
両陛下の祈り心…192
3．天に対する人のみち
天と人は関わらないのか…199
プロメテウスの火…206
4．太陽との結びつきを深める
太陽は万象の根源…215
太陽に対する格別な思い…220
光を得るための入念な準備…226
利他的精神の共有…178
未来へ後押しする力…190
被災地に届く大御心…196
災害から身を守る「直観」…203
戦士と犠牲者の相互理解…210
希望は心の太陽…218
朝をどう迎えるか…224
希望を捨てない心意気…228
結語　――大転換期を生き抜くために…232
主要参考文献

序章　日本のふるさとから想う

装丁デザイン　大久保 學

装丁写真撮影　田中 良知

カバー・表紙　岩手県陸前高田市　二〇一一年四月十九日
本扉　岩手県宮古市　二〇一一年四月十七日
序章扉　岩手県大船渡市　二〇一一年四月十八日
第一章扉　宮城県気仙沼市　二〇一一年四月二〇日
第二章扉　宮城県仙台市　二〇一一年四月十六日
第三章扉　宮城県気仙沼市　二〇一一年四月十九日
第四章扉　宮城県南三陸町　二〇一一年四月二〇日

遠野のことから書き始めたい。

岩手県の遠野市といえば、「民話のふるさと」として知られ、日本の原風景を残す場所だともいわれる。一九一〇（明治四十三）年に柳田國男が発表した『遠野物語』は、日本の民俗学の黎明を告げる一冊となった。遠野出身の佐々木喜善（小説家・民話蒐集家）によって語られた民話を、柳田が筆記して編纂したもので、最初は自費で出版された。そこには天狗、河童、座敷わらしなどの妖怪が登場し、神隠しや死者に関する怪談、あるいは神話など多岐に亘っている。

岩手県に筆者は仕事で何度も訪ねたが、遠野市にその頃はまだ倫理法人会もなく、未踏の地となっていた。「一度は遠野を歩いてみたい」との願いがようやく叶い、今年（二〇一一年）は二度、足を踏み入れることとなった。

ただし最初は、東日本大震災の被災地に向かう途中で立ち寄ったにすぎない。四月五日のことである。遠野市は北上高地の中南部に位置し、四方を山に囲まれている。内陸から太平洋側に出る要衝の地であるため、津波で壊滅的な被害を受けた岩手県沿岸部に行くための前線基地の役割を果たしていた。まだ春は遠く、周囲の景観を眺める間もないまま、車はすぐに釜石市に向かう山間の道路に入ってしまった。

二度目の訪問は六月二十九日である。倫理経営講演会の講師をつとめるべく、東北新幹線の北上駅から遠野市に向かった。まだ梅雨は明けておらず、曇天だが、山々の緑がみずみずしく目に飛び込んでくる。川沿いの長い桜並木は、満開の頃の見事さが想像できる。道の駅には、被災地の救援に向かう車両の姿があった。

夕刻の講演会のあとの懇親会は、震災からまだ四カ月も経ていないので、静かな場になるだろうと思っていたが、予想と違った。まずは八十四歳の語り部の老婦人が、遠野弁で「座敷わらし」の民話を一席。遠野にはそうした語り部が十数名いて、伝承者も育てているという。さらには賑やかな郷土芸能の「鹿踊り」が披露された。「復興に向けて元気を出そう」というメッセージをこめた余興だった。

翌日のモーニングセミナーのあとは、二時間半ほど遠野を見て回った。岩手県で二番目に高い早池峰山の麓にある早池峰神社、遠野市を一望できる高清水展望台、「南

部曲り家」と呼ばれる独特な古民家などである。梅雨晴れの光がまぶしいなか、遠野が「日本のふるさと」であることを実感できた。

遠野から震災の意味を問う

東京に戻ってからも、遠野のことがしばらくは脳裏から離れない。「三・一一」の大震災の意味を考え続けてきたことが、遠野をめぐって駆け回った。

たとえば、東北という場である。大震災、それも世界初の「原発震災」が東北で起きたことの意味をつくづく思う。『日本書紀』によると東北地方に日高見国（ひたかみのくに）と呼ばれる勢力圏があったという。そこはユートピアのような楽土だったという伝承もある。北上はヒタカミに由来するようだ。

方位学で東北は、丑寅（うしとら）の方位とされる。「表鬼門」とも呼ばれるその方位は、まさに鬼が出入りする門であり、「変革」を意味するというので畏怖されてきた。天地開闢（かいびゃく）の国常立神（くにとこたちのかみ）が、その方角に封印されているという伝承もある。東北がひらけると、

それまでにない新しい事態が発生するというのだ。

寒冷地の東北地方は、日本の中で平素は静けさを保ちながらも、熱狂的な祭りの文化を有している。方位学が言うことを鵜呑みにするわけではないが、東北三県を中心とした大震災が起こったとき、「これから日本で何かが始まるのではないか……」と震える気持ちで思ったものだ。

そのことが、日本の原風景を確かに残す遠野の景観と重なってくる。戦後の日本で変貌してしまった表層が、震災によって崩れ、忘れていたものが甦るのではないかという幻想に似た感覚であった。

「座敷わらし」に代表される妖怪の存在にしてもそうだ。妖怪漫画家の水木しげる夫妻を主人公にしたＮＨＫの連続テレビドラマ『ゲゲゲの女房』が、好評のうちに終了したのは、震災の半年前である。柳田國男の『遠野物語』を水木しげるが漫画化した『水木しげるの遠野物語』（小学館）という本も出ている。

大量にエネルギーを消費して生産力を上げようとする近代文明のもとで、消え失せ

かけたのが妖怪たちである。墓場は住居から離れた霊園という管理された集合住宅のようになり、街や家は夜でも明るい。妖怪の出番がなくなった。そもそも科学的合理主義に固まった人々の頭に、妖怪たちはつけ入る隙がない。しかし心の奥の「たましい」は、怪異な存在に畏れと親しみを抱いている。

近代的な土木工学の粋を集めて設計された防潮堤を、魔物のような大津波はものともせずに乗り越え、突き崩した。同じく、科学技術の最先端を行く原子力発電所を地震と津波が襲い、全世界を震撼せしめる大事故を引き起こした。それらの出来事は何を物語るのか。原因ではなく、意味を知りたい……。

生と死は接している

『遠野物語』には一一九の話が載っていて（『遠野物語拾遺』には二九九話）、九十九話には大海嘯（大津波）のことが出てくる。現代語に直して示そう。

土淵村の助役の北川清という人の家は字火石というところにあり、代々が山伏である。祖父は正福院という学者で多くの著作があり、村のために尽くした人だった。清の弟の福二という人は、海岸の田の浜へ婿に行ったが、先年の大津波に遭って妻と子とを失い、生き残った二人の子と共に元の屋敷のあった場所に小屋を掛けて一年ばかり住んでいた。

夏の初めの月夜に、福二が便所に行こうと起き出したときのことだ。便所は遠く離れた所にあり、波の打ち寄せる渚を通って行く。霧の立ち込める夜で、その霧の中から男女二人の者が近寄ってきた。見ると、女はまさしく亡くしたわが妻ではないか。思わずその跡をつけて、船越村の方へ行く岬の洞窟の所まで追って行き、妻の名を呼んだ。すると女は振り返ってニコッと笑った。男は誰かと見ると、同じ里の津波で死んだ者である。自分が婿に入る以前に、互いに深く心を通わせたと聞いた男である。

今はこの人と夫婦になっていると妻が言うので、「子供は可愛くはないのか」と問うと、彼女はやや顔色を変えて泣き出した。死んでしまった者と会話すると